

第三節 ギャンブルムエタイの理念

第一項 ビジネスムエタイ選手

現在の選手は、月一度から3週間に一度は、ムエタイの試合を行うのが普通である。Sports Authority of Thailand (通称コーコート)の定めるボクシングに関する規定の第23章に、「ノックアウトされた選手は、30日間試合をすることはできないが、ノックアウトされなければ、21日間の休息を置けば試合をしてもよい。但し、相手を1ラウンドでノックアウトした場合は、一週間の休息のみで試合をすることができる。」⁸⁴と規定されている。選手は、プロモーターの命令があれば、いつでも試合をせねばならない立場である。彼らは、一試合でも多くの試合をしなければならぬため、ケガをすることはできない。ケガをすればプロモーターが計画をしている三週間後の興行に出場できなくなり、プロ選手としての価値が下がり、あてにしていた来月のファイトマネーも入らない。このようなギャンブラーのための興行が行われるようになるとムエタイ選手の勝負観は、格闘技の醍醐味である相手を倒すことの必要がなくなる。なぜならムエタイ選手は、ギャンブラーが満足するような形で闘えば足りるからである。

スタジアムで試合を見ていると、試合の後半に観客が口々に「ポーレーオ、ポーレーオ」と言い出す。ポーレーオとは、「もう十分だ」という意味である。勝負がついたからもうこれ以上の攻撃をするな、という優しさの言葉であると考えていた。ムエタイの観客は、優しいと感心していたが、これは優しさだけの言葉ではない。ポーレーオと言う言葉の裏には、ギャンブラーが「もう十分に勝っているんだから、これ以上攻めて逆転負けしないでくれ」とか選手のオーナーやプロモーターからかけられるポーレーオの言葉は「これ以上やって、けがするんじゃない。次の試合に備えよ」という意味が含まれている。ムエタイ選手に「どうしてさっきのラウンドは、倒せたのに倒しに行かなかったの?」とたずねると、すべての選手が「もう十分勝っているんだからこれ以上は攻める必要がない。」と話してくれる。その言葉には、相手への優しさも自分の身体への労わりも込められている。ムエタイ選手は、壊しあってはならないのである。自分たちを壊しあっていたら、プロモーターが使う選手が減る一方であり、どちらのムエタイ選手も得をしない。同じようなレベルの選手が減れば減るほど自分の試合回数が少なくなり、ファイトマネーも入らなくなるからである。

また、ムエタイ選手がムエタイ以外に職業選択が少なかったことも挙げられる。第一章、第一節、第三項で述べたようにタイは、貧富の格差の激しい国である。そのタイにおいてムエタイ選手のほとんどは、最も貧しい農村からプロムエタイ選手としてバンコクにやってくる。彼に「なぜ、ムエタイの選手になったのか?」と尋ねると、決まって「好きだからはじめた。」と自発的にムエタイを職業に選んだと答える。しかし、そうは言うものの、

⁸⁴ Sports Authority of Thailand, 1999

彼らは、貧しさから抜け出すためにムエタイ選手になるのである。Vail は、次のように述べている。「ムエタイは、アメリカンドリームのようなはかない夢ではなく、貧困層にとって階層間移動（ソーシャルモビリティ）の手段となっている。」⁸⁵ 貧しい彼らにとってムエタイ選手という職業は、手っ取り早くて簡単にできる商売なのである。そのような彼らは、いくら好きで始めたとは言え、身体の資本を減らすような危険な闘い方をしようとはしない。

一般にムエタイの世界でよく言われるファイター（打ち合う選手）とフイムー（テクニシャン）では、プロ選手として金を稼げる期間が違う。ファイターは、身体が壊れやすく、20 代前半で引退を余儀なくされるが、フイムーは、20 代後半まで身体が保たれている。当然にファイトマネーが同じであれば、長期間ムエタイ選手を続けられる選手の方がムエタイジムのオーナーにとって性能の良いビジネスツールになるのである。

このようにムエタイ選手は、職務として毎月試合しなければならないとなれば、身体という資本を減らしてまでノックアウトを目指すよりも安全にポイントを取るような闘い方をするようになり、オーナーからも身体を安全に保てるような闘い方を要求される。

第一項 ムエタイビジネス

ムエタイ選手は、消耗するビジネスツールである。ムエタイ選手のオーナーは、三週間に一回、金銭を運んでくれるムエタイ選手という道具を長持ちさせなくてはならない。第一項で述べたように、最終ラウンドで「ポーレーオ」（もう十分だ）と叫ぶのは、商売道具を壊さないためである。ムエタイ選手は、Kitiarsa が指摘するようにオーナーの所有物のような側面を持っている⁸⁶。彼らの稼ぎは、半分がオーナーのものである。ムエタイ選手は、幼少の頃からジムで育ち、寝食をオーナーのもととする。そのため、ファイトマネーを得られるようになるとジムのオーナーに半分差し出さなくてはならない。田舎で育ったムエタイ選手は、バンコクにムエタイ選手として上京した際に、特別な条件がない限り、田舎のムエタイジムからバンコクのジムのオーナーに、選手としての権利を売られるのである。ムエタイ選手は売買されるものであるのだ。また、選手は貸し借りもされる。その場合は、ファイトマネーの半分が選手のものであるならば、四分の一が借りのジムのオーナー、四分の一が、本来のジムのオーナーのものである。このように、すべてムエタイ選手の稼ぎは、ジムのオーナーの稼ぎになり、ジムからファイトマネーの高いチャンピオンが一人でも生まれるとそのジムは潤う。ジムが潤うと、また幼い少年ムエタイ選手を一人養えることになるのだ。このファイトマネーの高い選手を創り上げるのがムエタイビジネスなので

⁸⁵ Vail 1998 ,p230

⁸⁶ Kitiarsa 2003

ある。一方、選手としてピークを過ぎてしまったムエタイ選手、けがが治る見込みがない選手などは、ムエタイビジネスにとってマイナスになる。少年ムエタイ選手であるならば、将来に大きな稼ぎが期待できるが、年齢のピークが過ぎて大金を稼ぐ選手になるケースはまずない。

あるムエタイ選手は次のように言った。タイのプロモーターと日本のプロモーターとの間でマッチメイクをする人間に「ヤー・ティン（捨てないでくれ）」⁸⁷と言った。この選手は、ラジャダムナンスタジアムでタイトルを数年前まで持っていた選手である。彼は、ムエタイのチャンピオンになった後、国際式ボクシングに転向した。日本へも来日し、日本人ボクサーとの対戦もあった。しかし、彼は激しいノックアウト負けを喫し、現在はブリラムの田舎のジムへ帰り少年に指導をしながら幾ばくかの金銭を得ている状態であると言う。彼のオーナーによれば、「もう身体が悪いからバンコクに居させても試合がない。だから田舎へ帰した。」⁸⁸と言うのである。このようなケースはムエタイジムで珍しいことではない。ムエタイ選手は闘える身体でなければ、オーナーにとっても必要のないものになってしまうのである。

第三項 オーナーと選手の賭博観

ある少年ムエタイ選手の父親はこう言った。

「ムエタイは相手と実力が合わない時、すぐレフリーが試合を中止にしてくれるから、息子（13歳）を安心して試合に出すことができますよ。実力が拮抗していないとギャンブルにならないし、実力が違いすぎると賭けが成立しないから、試合をミスマッチとして中止してくれるでしょ。」⁸⁹（Fig.58）

オールドムエタイ選手のデン師範（71歳）は、ギャンブルのない頃のムエタイを回顧して次のように言った。

「今のムエタイはいいよ。安全だよ。1ラウンドや2ラウンドで危なかったら試合が止められるんだから、俺達の頃はそんなものなかった。相手がどれだけ強くても最後まで立ち向かわねばならなかった。」⁹⁰

現在のムエタイ興行で、一方的に相手を追い詰めている試合の最中に突然、レフリーが試合を「ミスマッチ」として、試合の中止の宣言をすることがある。このようなミスマッチ宣言は、近年では珍しいものではない。デン師範は、続けて「昔（菱田注：彼の最後の試合は1974年）は試合の中止なんてものは、滅多になかった」と言う。なぜなら、このミ

⁸⁷ 2004.8.16 ワールドボクシング記者 青島律氏のご教示による

⁸⁸ 2007.8.27 ルンピニースタジアム シンノイ会長のインタヴューから

⁸⁹ 2005.4.2 ビッグショットジム 少年ムエタイの父親 45歳へのインタヴューから

⁹⁰ 2006.10.1 タマサート大学ムエタイ部、デン師範 71歳

スマッチ宣言は、八百長試合の疑いがある時にする宣言であるからである。これはムエタイ賭博を行なったことがある人ならすぐに理解できることであるが、ムエタイでは、実力の釣り合わない選手間では賭博が成立しない。最初から勝ちそうな選手が分かっていたら誰も負けそうな選手に賭けないからである。あまりにも実力に差があれば、レフリーがミスマッチ宣言をして試合を無効にしてしまう。これは八百長試合を防ぐためであり、実力が拮抗している試合でないと八百長の疑いがかけられるからである。こういう理由から実力に差がある選手の間では、対戦させられることがないため危険が回避できるのである。

日本やヨーロッパの国際式ボクシングの試合に行ったことのあるムエタイ選手（37歳）は「日本やヨーロッパのボクシングは、たくさんお金がもらえるから行くけども、タイより危険である。」と言った。理由はマッチメイクが平等ではないからだと言う。日本やヨーロッパのボクシング興行の試合にはムエタイのように賭博がないため、マッチメイクが平等でないと言うのである。つまり、彼は「その国の試合は、その国のチャンピオンに勝たせたいためのイベントであったり、体格の大きな選手との試合であったりするからである」と言うのである。2006年8月には、ヨーロッパでムエカチュアクの試合にも出場した。彼に「なぜ、そこまで危険を冒すのか？」と尋ねると、彼は決まって「俺は、ナックレーン（侠客）だから、大金さえ貰えれば誰とでも面白い試合をしてやる」と豪語する。

彼によれば、「外国の興行は、その国の選手の勝ちを望まれる興行であるし、その国の選手をスターにするための興行であるから、興行会社側や観客から望まれるのは、自分の勝利ではないんだ」と言った。もちろん、興行会社もイベントとして成功すれば良いわけであり、タイ人が負けなくても観客が喜ぶような良い試合をすれば、イベントは成功するのだが、次の興行収入につながる次のスター選手を生み出すことはできない。彼は「外国の興行は、観客がスター選手を見に来ていたのでスターがいないと興行をやってもお金が取れないから、スター選手は大切に試合をさせられるんだろう。」とも言う。彼によれば、日本を含めタイ以外の外国では、ギャンプラーがいらないためである。タイでは、ギャンプラーが興行収入を捻出してくれるために競技の公平性と安全性を保てるのである。

また、ムエタイの興行は、選手の家族、友人などは、基本的に無料で入場するのが普通である。理由は、ムエタイ選手も貧しければ、家族やその仲間も貧しく、入場料が払えないからである。興業主も貧しい人間からお金を取ることはせず、選手の家族には頑張っている選手の姿を見せてやりたい、というケースが一般的である。日本ではプロ格闘技のジムに所属していても無料で格闘技会場に入ることはできない。特殊なコネクションなどがあれば状況は違うかもしれないが、日本人選手は、興行のために自分でチケットを売るのが普通である。筆者は、日本でプロ興行に参加する時は、ファイトマネーがすべてチケットであったことがしばしばある。日本のプロ興行がタイと同じように友人と家族は無料であるとしていたら、興行収入が取れなくなってしまう。日本人選手は自分の出場する興行のチケットを売らねばならないという苦勞が伴う。タイのムエタイ選手は一切そのような事をしなくても良い。ギャンプラーが興行収入を捻出してくれるからである。これらのギ

ャンブラーが落とす入場料は貧しい少年を支援する費用になっているのである。少年ムエタイ選手は、ジムに寄宿し学校に通っているケースがほとんどで、彼らはムエタイで稼いだお金を奨学金のように使って学校へ通うのである⁹¹。そのため、彼らはギャンブラーをありがたい存在であると語る。負けると多少の嫌味を言われる場合があるが、ジムオーナーの力でギャンブラーに文句を言わせることはまずないし、勝ってチップを受け取る機会のほうが多いのである。

前述のタマサート大学のデン師範は、ムエタイ興行で行われているギャンブルを嫌ってスタジアムに行きたくないと言うし、元警察官のビッグショットジム会長は、ムエタイにギャンブルが付きまとはっては、教育になりにくいと言う。しかし、彼らと同様に少年の教育としてムエタイを少年に教えているソンプンジムの会長は、ムエタイのギャンブルに肯定的な見方をしている。彼は、「賭け事は大好きで宝くじさえやらないが、もしムエタイに賭けがなくなったらムエタイの関係者はみんな倒産してしまう。貧しい子供はもっと悪くなる。」⁹²と言った。ソンプンジムの所在するクロントイスラムは、アジアで二番目に大きなスラム地域である。そのクロントイスラムは、1990年代後半から覚醒剤が蔓延し、少年にも汚染していたと言うが、ソンプン会長は、その覚醒剤中毒の少年をムエタイジムに入れて治したケースもあると言う。このようにギャンブルによって生じた金銭が少年を救っているケースもあると話した。

上記のように、賭博は、ルール上の安全を管理する面においても、貧しい少年を救うためにおいてもなくてはならないと語る選手や関係者が多数存在している。



Fig. 58 ムエタイジムに通う親子

(2005.4.2 ビッグショットジム、父親はバイク便の運転手、息子はムエタイ選手)

⁹¹ 筆者が調査したタイの地方にあるほとんどのジムの会長が子供を学校に通わせてあげるためにジムを運営していた。またバンコクでもマイモンコンジム、ルークタパカージムは、主力選手になる選手は学生であった。

⁹² 2005.4.2 クロントイスラム ソンプンジム

第四項 暗黙のルールと芸術賞

現在のラジャダムナンスタジアムで行われているムエタイルールとスタジアムを創立した時のムエタイルールでは、若干の修正を除いてルールにほとんど変化がないと関係者は言う⁹³。しかし、一昔前のムエタイと現在のムエタイのレフリングでは、ブレイクの早さが違うと OB ムエタイ選手は口々に話す。一昔前とは、1980 年代以前のムエタイである。ブレイクとは、レフリーが選手間の膠着状態を分けるための命令である。このブレイクは、相手のクリンチワークが長引く時（相手と打ち合わないで揉みあっている状態）に注意され引き離されるものである。このクリンチワークは、首相撲（相手の首を取り合い、膝蹴りの攻防をする状態）なのか、相手の攻撃を苦し紛れに逃げるために相手にしがみついているのかを判断し、確実に双方の攻撃が止まった時や、相手が崩れて後頭部などを相手にさらしている危険な状態にブレイクがかけられる。このブレイクをかけられるタイミングが現在のムエタイと一昔前のムエタイでは、まったく長さが違うと、OB ムエタイ選手達は話していた⁹⁴。

1980 年の大スターであったサムランサック・ムアンスリン 48 歳は、以下のようにムエタイのレフリングの差異を話した。

「昔、俺達の時代まで（1970 年代中期～1980 年中期）は、イエーク（ブレイク）が早かった。試合の最中に膝蹴りを打ち出そうとしていたらレフリーがすぐ止めたよ。観客に俺達の打ち合いを見せたいからさ。」⁹⁵

上記のように言う OB ムエタイ選手は多い。相手と組み合うクリンチワークがあると、極端に試合にノックアウトが減る。なぜなら頭をパンチで狙われる距離ではないため、リスクが少ないのである。相手と組み合う時間（クリンチワーク）を取っていれば、選手の身体が傷つかない。現在のムエタイでは、レフリーがブレイクをかけるタイミングも遅く、相手が危険な倒れ方をしたり、相手に背面を見せたりした時などにしかブレイクがかからない。ブレイクを遅くしている理由は、打ち合うよりもリスクの少ない、組み合っただけの膝蹴りの攻防を奨励することにある。一方、日本を中心に行われている K - 1 では、この組んでの膝蹴りは反則としてペナルティーを与えられる（第四節、第二項で詳しく述べる）。これは、K - 1 の興行会社がパンチでの打ち合いを減らさないようにしているからとみることができる。

ムエタイの採点基準について、現在のムエタイは、相手へのダメージを与えた点数で採点することになっている⁹⁶。しかし、ムエタイには明文されていないルールが存在する。廻

⁹³2006.10.1 ラジャダムナンスタジアムオーナー ジャルンポーン氏 レフリー、記者から

⁹⁴2006.10.1 サムランサック・ムアンスリンと複数の OB ムエタイ選手の会話から

⁹⁵2006.10.1 サムランサック・ムアンスリン 48 歳

⁹⁶タイ国立スポーツ局（コーコートー）では、勝敗の採点基準を 相手に技を当てた数、技の強さ 相手のバランスを崩した どちらが積極的に攻めていたか 防御の正確さ ルールを遵守しているか、などの 6 点を採点基準にしている。1999,p188 しかし、ルンピニ

し蹴りの芸術点である。廻し蹴りは、タイで美しいとよく言われる技である。修行を積み重ねできない技である。この廻し蹴りは、見た目に派手であるが実際にはパンチより危険ではない。ムエタイのジャッジはこの廻し蹴り（上段蹴り、中段蹴り）の打点位置の高い蹴りを美しい蹴りとして得点化するのである。この廻し蹴りに高い評価を与えることによって、パンチで打ち合って、選手の身体を壊しあう事を防ぐことができる。廻し蹴りといっても下段蹴り（太ももへの蹴り）ではない。最も破壊力のある下段への蹴りは、ムエタイの芸術として美的とは言われない。これは、美的得点の奨励が選手の身体を保護しているのである。ラジャダムナンスタジアムとルンピニースタジアム両方のレフリーにこの美的得点の有無を尋ねても「すべてダメージを与える攻撃は得点になりますよ。」⁹⁷との答えが返ってくるだけであるが、テレビの解説では、廻し蹴りの連打に「美しい蹴りです。これだけ美しい蹴りの連打をもらったらもう逆転は難しいでしょう」というような解説がなされる。テレビ解説者も廻し蹴りの高得点を認識しているのである。また、観客であるギャンブラーも美しく強い廻し蹴りは、よい得点であると口々に言う。これは明文化されていない暗黙のルールであると考えてよいであろう。

明文化されていないギャンブルムエタイのルールに、1、2 ラウンドのポイントは加算されないこともあげられる。ムエタイ選手が1、2 ラウンドを本気で闘わないのは、この時間がギャンブラーに、賭ける選手を決定する時間を与えている時間であるからである。この1、2Rは、レフリーも「チョック、チョック（ファイト、ファイト）」と攻撃をけしかける命令をするのだが、それは建前で、まったく闘わなくても選手に罰則を与えることはしない。また、ジャッジも1、2 ラウンドは、ポイントを真剣にカウントしているようには見えない。また、1、2 ラウンドの得点を尋ねると「10：9 や 10：8 もある」と説明されるが、ほとんどの場合は、イーブンの10：10 としてカウントしているようである。ジャッジは、ギャンブラーから見えないようにジャッジ席（Fig59）であるシークレットボックス内で採点をしている上、この得点は公表もされない。公式ルールにおいてもタイトルマッチ以外は、ラウンド毎の点数を公表する義務はないのである⁹⁸。つまり、ルール上でもギャンブルが行われやすい環境にあると言ってよいだろう。

レフリーとジャッジにムエタイの攻撃で得点の高い攻撃は何であるかと尋ねると先にあげたように「相手にダメージを与えた攻撃はすべて得点になる。」との答えが返ってくる。しかし、ギャンブラー達は口を揃えて、得点の高い攻撃は膝蹴りや脇腹への廻し蹴りであると言う。パンチではないのか、と聞くと「パンチは後半のラウンドで打つほど、負けているのをアピールするようなものである。」⁹⁹と言う。

ーは、アグレッシブ、ラジャダムナンは、防御点も加点するが、いずれもどちらがより相手にダメージを与えたかで採点が決まる。2007.5.20 ウィラサクレックウォンパサー

⁹⁷ 2004.8.9 ルンピニー タノンレフリー、2006.1.18 サマーンチャタオーイレフリー、2007.8.26 ラジャダムナン アムナーレフリー

⁹⁸ 2007.8.26 ラジャダムナン アムナーレフリーのご教示による

⁹⁹ 2007.8.23 ラジャダムナンスタジアム シエンムエ ロバート氏 52 歳

ギャンブラー達の言葉が正しければ、レフリーの言う「すべて得点になる」と言うのは、表向きのルールになり、実際にジャッジが得点として採点しているのは、膝蹴りと廻し蹴りということになる。ならば、これも明文化されていない暗黙のルールと言ってよいだろう。そのような慣習の中ではムエタイ選手も、激しい攻撃をしてリスクをおうのは意味のないことになる。そうなれば、双方の選手が1、2ラウンドに身体を傷つけずに、相手との軽い攻撃にタイミングを合わせて動くのも納得できる。スタジアムのレフリーとジャッジを含め、ギャンブラーのために暗黙のルールを作っているようである。

また、ムエタイには芸術技賞金（ランワン・ピセー・シラッパ・ムエタイ）が存在する。この芸術技賞金は、ある特別な技を使って相手を倒した場合に与えられる賞金であるが、パンチで相手を倒しても賞金は出ない。賞金は、チョラケーファードハーン（ワニの尻尾蹴り、回転後ろ廻し蹴り）に3万バーツ（約9万円）が払われ、ソークラップ（回転後ろ肘打ち）に2万バーツ（約6万円）が払われる。高度な美しい技が褒賞されるのである。この芸術技賞金は、ムエタイの技術を高度にし、試合の面白さを増大させるが、パンチによるノックアウトに対してはKO賞金をだすことがない。プロモーターによれば、パンチによるKO賞金を出さないのは、選手が壊れるのを避けるためである¹⁰⁰。この芸術技賞金の制度がラジャダムナンスタジアムに導入され始めたのは、ムエタイ選手が組んでの膝蹴りばかりするようになったという1990年頃からである、という聞き取り調査の情報が得られた¹⁰¹。これら暗黙のルールと芸術賞は、ムエタイの芸術性を保持すると共に、ビジネスツールである選手を壊さないための手段であると考えてよいであろう。ノックアウトを目的とするだけムエタイのままであっては、選手に怪我が多くなり、ムエタイビジネスに支障をきたすからである。

一方、日本で行われているキックボクシングの興行団体は、KO賞金を出す会社が多く、激しい倒しあいを奨励しているかのようにも見受けられる。また、ラオスで行われているムエラオも、相手をどのような技で倒しても主催者からチップとしてKO賞金が500バーツ（約12ドル）与えられていた¹⁰²。ラオスの物価は安く、外国人の家で働く家政婦の月給が40ドルであることを考えると、このKO賞金は決して安くない。また、マレーシアで行われているトモイは、KOかTKOでないと勝敗がつかず、これらがなく引き分けにされてしまう。ファイトマネーにも勝った選手と負けた選手では差がつけられていた¹⁰³。これは、トモイの主催者がどちらも倒れないと勝敗がつかないと認識しているから、と考えられる。キックボクシング、トモイ、ムエラオの観客は、ギャンブル目的で試合を観戦して

¹⁰⁰ テレビマッチでは、KO賞金が出される場合がある。1999.8.28のパリンヤーVSサムライモーカセサート

¹⁰¹ 2007.8.24 シンノイ ムエタイジムオーナー70歳、オートゥープロモーター59歳、チャトイプロモーター50歳、ソンマークボンサク オーナー66歳へのインタビューによる

¹⁰² 2006.11.24 ラオス ビエンチャン

¹⁰³ 2006.3.26 マレーシア コタバル

いるのではなく、勝敗よりもエキサイティングな試合を求めているからである¹⁰⁴。

キックボクシング、ムエラオ、トモイが、KO 勝利を奨励するのに対し、ムエタイが、KO を褒賞しないのは、三週間に一回の頻度で闘うムエタイ選手の身体を保護するためである。加えて、ムエタイの観客はギャンブラーであり、彼らにとっては、どちらが勝つか負けるかが、重要なポイントであって、KO があるかないかなどは重要な事ではない。したがってムエタイ選手は、一層ノックアウトを求めず、自分の身体が傷つかないように闘うのである。



Fig 59 ラジャダムナンスタジアムのジャッジ席

(採点の途中経過は、ギャンブラー達に見られないように工夫されている。)

第四節 ギャンブルムエタイの技法

第一項 ギャンブルムエタイの闘い方

現在のムエタイでは、1 ラウンドと 2 ラウンドは、試合をしているというよりも踊っているかと思うほど、相手との距離をとってタイミングを計っているだけのように見える。この闘い方を、オールドムエタイ選手であり、沢村忠と激闘を演じたガオ東京は、次のように語った。

「俺達の時代では、レフリーがチョック（打ち合せ）といっぱい言うんだよ。1 ラウンド目はまだ相手の様子を見ていたのに、チョックと言われても行かないと注意されるんだ。今のムエタイ選手は、レフリーがいくらチョックと言っても打ち合わないだろ？ギャンブラーが賭ける方を決めるまでチョックしなくても、打ち合わなくても大丈夫なんだよ。¹⁰⁵」

筆者の選手経験で言えば、5 ラウンドの試合を闘う時、1 ラウンドから積極的に打ち合い

¹⁰⁴ ムエラオの観客は内部ではギャンブルをしているが、公的には認められていないため観戦目的はギャンブルがメインではないと見受けられる。

¹⁰⁵2005.10.1 ガオ東京 ラジャダムナンスタジアム

を仕掛けた場合、1 ラウンドにディフェンス側に回った選手のほうが、後半ラウンドにスタミナが温存されて、勝負に勝つ場合が多々ある。しかし、このような方法は、試合の戦術として有効ではあるが、現在のムエタイ試合において 1、2 ラウンドは、戦術としてディフェンスをしているわけではなく、明らかに双方がわざと本気で闘っていないのだ。これらは、第三節、第四項に述べたように、ギャンブラーに「自分達のどちらに賭けるのか」を決定する時間を与えているからである。このような時間は、スポーツ競技としては必要のない時間である。

1980 年に発行された「The Thai boxing magazine」は、ムエタイの闘い方が以前とは別のもので変わってきたと指摘している。

「近頃のムエタイは、見て楽しく感じるファイトは、第 4 ラウンドの一つしかない。試合の興奮するところがもう他にない。1 - 3 ラウンドまでは、相手を打診しているだけで、4 ラウンドに入ったらパンチやキックの連打をして相手よりポイントを取ったら、それ以上何もしないままで試合が終わってしまう。」¹⁰⁶この雑誌では、1 ラウンドから 3 ラウンドまで何もしないと書かれているが、実際に、1980 年代には、既に初回のラウンドを真剣に闘わないといった闘い方が現われ始めたようである。

オールドムエタイファンに話を聞くと、1960 年代、1970 年代には、ムエタイ選手のワイクルーの時間にギャンブラーが賭けはじめる人が多かったと言うが、現在のムエタイファンは、1、2 ラウンドの様子を見てから賭けをはじめている。選手も、1、2 ラウンドはわざと本気で闘わず、ギャンブラー達に賭ける方を見定めさせているのである。また、最終の 5 ラウンドに入り、ポイントに差が出てくると、勝利に近い選手も敗者に近い選手も積極的に闘うのをやめて時間を稼ぎ、相手の前で距離をとって踊る状態になる。5 ラウンドも後半になって、ポイントに差があると、ノックアウトでなければ逆転勝ちをすることができない。しかし、ムエタイのクリンチワークを認めたルールでは、逆転のノックアウト勝ちを見ることができない。

勝利がほぼ間違いない選手は、危険を冒してまで攻め入ろうとせず、自分の身体の安全を保持する。劣勢の選手は反撃しなくてはならないのではないかとという疑問が起きるが、劣勢のムエタイ選手のオーナーもこれ以上無理をさせずに、次の試合の準備をさせる。負けた選手は、「負けを素直に認めなくてはいけないし、無用な痛みは必要がない」と説明する。第三項で述べたように、ビジネスムエタイ選手としてけがを回避しなければならないのである。

第二項 ギャンブルムエタイの技法（1970 年代後半～現在）

1970 年代後半は、ムエタイスタジアムの観客のギャンブラーになった時期である。選手

¹⁰⁶ 「The Thai boxing magazine」1980.9.11 ,p13

が小型化し軽量級の選手の試合で KO 勝敗は減多に見られなくなった。さらに、上で述べたように 1 ラウンド、2 ラウンドは、積極的な攻撃をしなくなった。

ギャンブルムエタイ時代を象徴する選手の技法も、前節で述べた方法と、同様に手の攻撃と足の攻撃に分けて、その数を以下に検討した。資料には、ムエタイの名選手を記録した DVD「Sut yot muaythai suk Onesongchai(The best of Onesongchai promotion」2005 vol.1～7 を用いた。

1987 『チャモアペット・ハーバラン対サムランサック・ムアンスリン』(Fig 60)

チャモアペットの手からの攻撃が 34 回に対して足からの攻撃は 137 回であった。足が約 4 倍である。さらに、組み合っている時間（クリンチワーク）が試合の 3 分の 1 を占めている。

1987 『チェリー・ソーワニット対スーパレック・ソーイサン』(Fig 61)

チェリーの攻撃はパンチが 8 回に対して足からの攻撃が 102 回であった。蹴りが 10 倍以上の割合を占めている。

1992 『サムゴー・チョーラチャスバック対ピッチットノーイ・シットパンラン』(Fig 62)

サムゴーの攻撃は、手が 3 回に対して足からが 53 回であった。足からの攻撃が約 17 倍である。また、組み合っている時間（クリンチワーク）は試合の半分近くを占めている。

現在のムエタイ技法を分類した Klonshak Ngammeesri は、技術を 5 つに分けてムエタイの試合での使用頻度を報告している。

「ムエタイの試合全体を通してみると kicking（菱田注：蹴り技）45.51%、knee hitting（菱田注：膝蹴り）24.41%、boxing（菱田注：パンチ）22.13%、push boxing（菱田注：押し技）7.49%、elbows（菱田注：肘打ち）0.46%¹⁰⁷。」

これらの資料からは、ムエタイの技法については、パンチよりもキック・膝蹴りが主になってきたことが窺える。

ギャンブルムエタイ時代に入ると、足からの攻撃（蹴り）が以前の時代より増えたのが分かる。さらに、選手が組み合っている時間が長くなってきた。クリンチワークは、日本では、首相撲と呼ばれ相手を崩すために用いられるものである。このクリンチワークでは、組んでいる間、膝蹴りを出すしか方法はない。クリンチワークを用いれば、相手の攻撃を受けても脳が揺らされることがなく、ノックアウトにつながる危険性は低い、しかし、相手を倒すこともできない技法である。

1978 年 3 月 18 日にラジャダムナンスタジアムのライト級チャンピオンについた初の日本人である藤原敏男は、「自分が試合をタイでしていた頃のムエタイは、ミドルキックと膝

¹⁰⁷Howard 1998,p222

蹴りが主な攻撃であった。その頃のタイ人は、日本人のようにパンチで打ち合っていたら身体がもたないという事を、試合の経験の多さから知っていた。」¹⁰⁸と語る。

また、上記の第一節、第三項で述べたように、レフリーがブレイクをかけるタイミングが遅くコールされるようになってきたと述べたが、現在のムエタイ選手は、ブレイクがかけられないことに拍車をかけて、対戦相手と打ち合うより相手にクリンチワークを挑む試合が多く見られるようになった。この状態では、頭を強打されることはなく、注意を払うのは、自分の胴体に相手の膝蹴りを打ち込まれないようにするだけである。ギャンブラーは、このクリンチワークでの膝蹴りの数を数えて判定の有利不利を決定し、自分の賭けている選手の攻撃が相手の胴部に入ると「オーイ、オーイ」と膝蹴りにあわせた歓声をあげ、ジャッジに得点をせがむアピールをする。このクリンチワークは、日本のK - 1では、厳しく注意される¹⁰⁹。なぜなら、試合にクリンチワークが多くなると、相手と打ち合う時間が少なくなり、KO 決着は極端に減り、試合にスリルがなくなり、面白みが小さくなってしまふからである。しかし、ムエタイでは、打ち合っただけで身体を早く潰してしまうより、商品としての身体を保持するために、このクリンチワークを好んで用いているのである。

¹⁰⁸ 2007.5.7 元ラジャダムナンスタジアム チャンピオン藤原敏男へのインタビュー

¹⁰⁹ K-1 インターナショナルルール(改訂日 2006 年 2 月 27 日)第 7 項 両手で相手の首を掴む首相撲からの膝または足での攻撃は 1 回のみとする。よって、両手で相手の首を掴んでの連続攻撃は反則とする。但し、片手で首を掴んでの連続攻撃は有効であるが、相手にダメージを与えない攻撃と主審が判断した場合はブレイクを命ずる。第 8 項 膠着状態を誘発する掴み、組み付きは、一切これを禁止する。但し、レフェリーが有効打と判断する攻撃を加えるために瞬間的に相手を抱え込む、または掴む事は容認する。しかし、仮に有効打と認められても、その直後に掴んだままの状態で膠着させたり、相手の攻撃を逃れるために自分から掴み、組み付きに行く行為には、厳しくペナルティーを与える。(K - 1 オフィシャルホームページ)



Fig 60 膝蹴りの攻防

(チャモアペット(青)の膝蹴りに対してサムランサック(赤)がパンチを打っている場面、サムランサックはパンチの強い選手として知られるが、チャモアペットは、サウスボークからの膝蹴りと左ミドルキックで試合を組み立て堅い守りをする選手である。彼は、クリンチワークを積極的に用い、試合の約3分の1がクリンチワークであった。)



Fig 61 蹴り技の増加

(チェリー(赤)の攻撃はパンチが8回に対して足からの攻撃が102回であった。蹴りが10倍以上の割合を占めている。)



Fig 62 クリンチワークの増加

（サムゴー選手（青）の攻撃は、手の攻撃よりも足の攻撃が約 17 倍になっていた。試合中にクリンチワークが半分以上であった。）